

ぼたぼた

中三・矢澤 希空

この夏休みこそ受験勉強に本腰を入れるぞ、と何度も見たくはない一学期の通知表を抱えながら家に帰った日が恨めしい。

私は貴重な中三の夏休みを今病室のベッドの上で過ごしている。今頃塾の夏期講習に参加しているはずだった。入院して丸一週間、原因不明の高熱と体中の痛みになされた。頭の中がぐらぐららんで、勉強のことを考える余裕もなく、付き添いの母にさえ、まるで小さな子どものように悪態をついてしまうほどの苦しさや痛みに襲われた。

入院から十日ほどたつてようやく熱が下がった。頭の中も悩める受験生に戻った。ご飯の粒も見えないような水状のおかゆでも、久しぶりの口からとる食事の美味しさは別格で飲み込むのが惜しかった。久しぶりにシャワーも浴び、体を洗うことの喜びを噛みしめた。当たり前のこと全てが素晴らしいことであつたということに気付いた。そして高熱があつたとは言え、付き添いの母に八つ当たりをしてしまったことも申し訳なく思った。

しかし、この高熱や体の痛みの原因を突き止める検査のため、私の退院は未定だった。

四人部屋の窓際から、一番遠い私のベッドからは外を見ることが出来ない。病室から出られない私のために、母が月の満ち欠けの分かるカレンダーを置いてくれた。しかし、そんなカレンダーの月だ

って、二十四時間も見ていたらさすがになんとも思わなくなる。

日中は代わる代わるいろんな科の医師たちがぞろぞろと私のベッドの周りにやって来る。血液検査、尿検査、今日は内科、明日は眼科、明後日は脳外科：：検査三昧だった。しかしおかげで退屈はしなかった。生まれて初めてMRIの筒に押し込められたりもした。とはいえ移動は車椅子、ほとんど体を動かさないまま夜がやって来る。疲れないから眠れない。勉強が出来ないことよりも、夜眠れないことが最大の悩みになった。当たり前だったことのありがたみと同時に眠れないことの苦しみも知ったのだった。

毎日面会終了時間の二十時を過ぎて母が帰宅した後の夜は特に長い。目がぎらぎら冴えていても四方をカーテンに囲まれたこの小さなスペースから出ることが出来ない辛さは、経験した者にしか分からないだろう。

自由が制限される中、私の臭覚は異常に敏感になっていた。唯一の楽しみである病院食も遠くの配膳ワゴンの匂いだけで心が躍った。聴覚も同様に消灯後の私の耳は体全体が耳になったかのようなだった。ある晩のこと。消灯前に例のカレンダーを恨めしそうに見つめると、その晩は満月だと知った。

「満月だろうと三日月だろうと今の私にはその月さえ見ることが出来ないんだから」

私はふて腐れながら布団から顔だけ出し、消灯を迎えた闇の中で目をぎらつかせていた。すると、明らかに看護師さんの足音ではない音が廊下から聞こえてきた。とても小さな音だったが、数人がぼたぼたと歩いているようなかわいらしい音だった。さらに耳を澄ましてみると、そのぼたぼた達の話し声も聞こえる。每晚九時の検温を最後に、朝まで看護師さんは病室には来ない。私はそのぼたぼた

達を一目見るために病室を抜け出した。

足音に気をつけながらぼたぼたが聞こえた方向に廊下を進んだ。中学生の私は小児科病棟に入院していたが、隣は産科病棟で夜中にぼたぼたすることもよくあった。赤ちゃんが生まれるのは昼も夜も関係ないからだ。さっきのぼたぼたは産科病棟に向かっていたようだった。この日も産科病棟は小児科とは対照的にこうこうと灯りがついていて、看護師さんたちは忙しそうに歩き回っていた。私はひたすらぼたぼた音源を探し歩いた。すると分娩室の方から、

「ふんぎゃあ」

という元気な赤ちゃんの泣き声が聞こえてきた。今ここで一人の命が誕生したと思うと、感動で心が揺さぶられた。

すると、立ち止まってその感動に浸っている私の前をあの聞き覚えのあるぼたぼた音とともに可愛い四人組が通り過ぎようとした。

「うわあ、ぼたぼた達発見！」

私は思わず声を上げてしまった。四人のぼたぼた達は私の顔を見上げると足を止め、私の周りに集結してきた。私の膝丈くらいしかない小さいぼたぼた四人組は、人間と言われれば人間のようにでもあがるが、でもちよつと違う、言葉ではなかなか表現しづらいが、ふわっとした雰囲気を持つ小さな生きものたちだった。八つの目に私は取り囲まれ、一番リーダー格っぽい一人がこう言った。

「おまえ小児科病棟住みだろ。ずっと熱出してた中学生だ」

私はぼたぼたから話しかけられたことよりも彼が私の存在を知っていたことに驚いた。「どうして知っているの？」

「俺たちはこの病院の人間のこと全部知ってるのさ。それに俺たちのことが見えるのは子どもだけだしな。小児科病棟に入院して、体調が良くなってくると俺たちの存在に気付いた子どもがおまえみた

いに俺たちを探しに来るのなんざあ、珍しくもねえ」

「じゃあ君たちは一体何者なの？」

なぜか少し安心した私はいきなり直球で質問した。

「みんなそれ聞くんだよ。俺はテン」

「私はリン」

「あたちはネって言うの」

「僕はシヨウ」

「まあ、簡単に言うと俺たちは命の運び屋だな。四人でこの仕事をずっとやってる」

「ずっとっていつから？」

「それは俺たちにも分からねえ。そしていつまでやるのかもな。と
ころでおまえ、来週の金曜日の退院、おめでとうな」

「え？ 私まだ退院日決まってるじゃないよ」

「そんなの医者より俺たちの方が知ってるのさ。それに今日は満月、
一番忙しい夜なんだ。おまえと遊んでる暇はない。じゃあまたな。

満月と新月の日以外なら遊んでやってもいいぜ。あと一週間せいぜ
い養生しな」

テンはそう言うと三人を引き連れてぼたぼたと再び分娩室の方へ
向かっていった。私は一瞬、夢かと思ったが、すぐに我に返り、急
いで彼らを追いかけた。

ぼたぼた達は明かりの灯る分娩室の前を通り過ぎると病棟の奥の
闇に消えていった。私にはその暗闇まで彼らを追いかける勇氣はな
かった。しかし暫くすると彼らはその闇の奥から再び現れた。彼ら
は大切そうに何かぼんやりと光る玉のようなものを運んで来た。そ
してその光る玉を抱えた四人がすうっと分娩室の中に消えたかと思
うと、その瞬間分娩室から、

「ふんぎゃあ」

と元気な赤ちゃんの泣き声が響き渡った。

「私、今日二人の赤ちゃんの誕生に遭遇しちゃった」

今晚二度目の命の誕生に感動している私の目の前に四人組が再び現れた。彼らは別の病棟に向かって急いでいるようだったが、さつき大切に抱えていた光る玉は彼らの腕の中にはもうなかった。

「待ってよ、どこ行くの」

私は小さく叫んだ。

「うるさいなあ、今日は忙しいって言ったろ。次は内科病棟なんだよ」

私を振り切ろうとする彼らを私は小走りで追いかけた。

産科病棟と違って静まり返った内科病棟に、細い光が漏れている病室が一室あった。ぼたぼた達はその病室の前に整列して静かに待っているようだった。さつきの威勢の良さはどこへ消えたのかと思うほど、テンは他の三人をまとめて微動だにもしない。近寄ってはいけない雰囲気を感じた私はその場で見守ることにした。すると突然四人はさっと病室に消えた。その直後だった。病室から家族の声と覚しきすすり泣きが聞こえてきたのだ。と同時に、四人はまたあの光る玉を大切に抱えて病室の前に現れた。次第に病室から聞こえるすすり泣きは号泣に変わっていった。今この場で命を終えた人がいる。胸が締め付けられた。私の目の前をぼたぼた達はその光る玉を大切に抱えて静かに病棟の奥の闇へ消えていった。そしてその後、彼らが戻ってくることはなかった。仕方なく私は病室に戻ったが、なかなか寝付けなかった。

私は満月の夜、誕生と旅立ちの場面に遭遇した。この病院の中で人間の命がぼたぼた達によって運び込まれては、また運び出されて

いる。私もその中の一人なのだ。そう思うと頭の中がどんどん冴えてますます眠れなかった。

翌日は久し振りに寝坊した。心地よい疲れが体に残っていた。疲れれることも幸せなのだと感じながら、遅い朝ご飯を食べた私はこの日も検査で日中を過ごしたが、夜が楽しみだった。今晚もぼたぼた達に会えるのだから。

消灯後、私は息を潜め、耳を澄ましていた。すぐに病室を飛び出せるようにスリッパを履いたままベッドで待機していた。しかし、彼らがやって来ることはなかった。翌日もその翌日もやってこなかった。

こうしてついに退院の前日の夜を迎えてしまった。ぼたぼた達との再会を諦めて最後の消灯時間を迎えた私が目を瞑ろうとしたとき、布団の上に何か不思議な重みを感じた。なんとそこにはぼたぼた達が座り込んでいたのだ。「よう、いよいよだな。俺たち今日は暇だから遊びに来てやったぜ」

私は驚きと嬉しさで心が躍った。そして朝まで私はぼたぼた達と話をした。

「おまえ、輪廻転生って言葉知ってるか？俺たちはこの世に命を運んでくるし、この世から命を運び出したりもする。でもな、どちらも淡々と受け入れるってことが生きるってことなのよ。おまえ、入院して生きることの幸せってもんを初めて感じたろ？生きることしてな、普段は実感しづらいものなんだよ。でもおまえはここで生きることの大切さを知った。俺たちを見つけて追いかけてくるおまえみたいな子たちはみんなここで過ごしたことが無駄にはならない。なぜならおまえたちは未来のある子どもだからな。まだ子どもであるおまえにとって命の大切さを学んだ貴重な夏休みだったと思



えば塾で過ごすより有意義だったはずだぜ。おまえはこれからもたくさんの命のやりとりを受け入れて生きていく。そしていずれおまえの命も俺たちが運ぶときが来る。そのときまた会おう」
そう言うとりん、ネ、テン、シヨウの四人はすうっと私の前から消えたのだった。

画：こがしわかおり